

「創年」が活躍するまちづくり

NPO法人全国生涯学習まちづくり協会 理事長 福留 強

市民が学び合い、自治能力を高め、相互に尊敬し合うコミュニティの形成は、まちづくりの究極の姿である。新たな目標を掲げて人生に再挑戦し、身につけた知識や技術を地域社会に役立てようとまちづくりに参画する生き方は、生涯現役の創造的な姿といえる。そういう人びとを高齢者や老人と呼ばず、地域社会を担っていく重要な人材として、「創年」と呼ぶ考え方と提唱してきた。

館山市では、市民が主体的に戦争遺跡や里見氏城跡など文化遺産の保存と活用による「館山まると博物館」のまちづくりを進めてきた。なかでも富崎地区の活動は目覚ましい。行政の及ばない分野に積極的に関わり、魅力ある文化や歴史に磨きをかけて、おもてなしの精神と伝統継承に力を発揮している。特にノーベル医学・生理学賞の大村智先生をはじめ、全国の著名な美術家の皆さんと一緒に取り組み、大きな成果を挙げたことはとても素晴らしい。民官協働で推進している館山のエコミュージアム活動は、全国でも先進事例として評価されており、地方創生の大きな可能性を秘めている。

(聖徳大学名誉教授・事業構想大学院大学 事業構想研究所客員教授)

「場所の記憶」の複合によるストーリーづくり

神奈川大学 特別助教 ちよん いるじ 鄭 一止

地域全体を博物館と捉えるエコミュージアムのまちづくりが全国で増えている。なかでも、「場所の記憶」に基づき、それを収集・編集しアーカイブを構築する一方、これを生涯学習や地域観光などに活かしていく手法が注目されている。「場所の記憶」とは、個人や集団の有する「場所の記憶」や、特定の場所における「記憶」など多様である。

「館山まると博物館」では、活動に参加する市民学芸員らが身の回りに眠っている「場所の記憶」を掘りおこして拾い上げ、複合的につなぎ合わせていく取り組みが非常に面白い。たとえば、戦争の歴史と渡米したアワビ漁師の出来事がつながることによって、地域史から世界史的な研究や交流の展開が可能になった。新しい視点をもった融合的な学問の誕生といえる。

さらに、青木繁が小谷家に滞在して『海の幸』を描いたという出来事と、その建物を守ろうとする地域住民や全国の画家による協働が生まれ、漁労史や祭礼・伝統料理など漁村の多様な歴史文化をつなぐことによって、よりダイナミックなストーリーが生まれ、新たな美術解釈までも展開している。

館山市では、地域内の文化財指定だけでなく潜在的な文化財までも拾い上げ、地域ならではの文脈づくりを行う「歴史文化基本構想」や、これに基づく取り組みを支援する「歴史まちづくり法」などの仕組みづくりが期待される。

「館山まると博物館」～ 蘇りのものがたり

NPO法人安房文化遺産フォーラム 代表 愛沢 伸雄

日本地図を南北逆さに見ると、館山はその頂点に位置する。かつては近代水産業の発展に関わり、あるいは海難者を助け、海路を通じて人びとが交流共生した。半島先端は文化果つる地ではなく、豊かな文化にあふれる地であった。中世に170年安房を治めた里見氏は、改易から200年後に曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』によって再び光が当てられた。温暖な海辺の保養地は古くから「医者どん」も多く、転地療養の適地であった。99%壊滅した関東大震災では、住民と行政が力を合わせて復興した。戦争においては重要な戦略拠点となり、終戦直後に本土唯一の「直接軍政」を敷かれながらも、平和裏に戦後日本を最初にスタートさせた地となった。青木繁がエネルギーあふれる最高傑作を生みだした館山は、まさに「蘇りの地」である。こうした先人たちの物語を現代に活かし、未来を創作していきたい。

(千葉大学教育学部非常勤講師・青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会 事務局長)